

後藤重巳先生への追悼の辞

飯 沼 賢 司
(別府大学文学部長)

後藤重巳先生が亡くなられてから、早くも一年近い歳月が流れました。歳月は容赦なく流れて行きますが、まだ、先生が亡くなったという実感はなく、「よー」といいながら、ひよこり大学を訪ねられてくるような感覚があります。

一昨年、十一月二十三日、別府大学史学・文化財学科、史学研究会の五十周年記念の会が開催されました。後藤重巳先生は、史学科、史学研究会の創設以来のメンバーで、永年、史学研究会の会長も務められました。そのため、この会は先生にとっては大変重要な会であり大層楽しみにされていたと思いますが、その前日に入院されてしまいました。

私は、現史学研究会会長の山本晴樹先生と一緒に前日に体調はどうか気になってお宅を訪ねたところ、病院から戻った奥様と会い、入院のことを知りました。それから、体調がさらに悪化し、正月は一度家に戻られたと聞いていますが、一月半ばかり再び入院となり、昨年四月二十三日の夜半、享年七十九歳で他界されました。それでも、その前に、先生は長年の功績を評価され、秋の叙勲で「瑞宝中綬章」を授与され、そのお祝いの会ができたことはせめてもの救いです。あのとときの先生の照れくさそうな満面の笑みを今も忘れられません。

今回の追悼記念論集に当たり、先生の経歴と業績、それと人柄について少し述べさせていただきたいと存じます。先生は大分県竹田市に生ま

れ、昭和三十二年に國學院大学史学科を卒業し、昭和三十六年に別府大学助手兼附属高校教諭に奉職しました。以後、平成二十一年三月に別府大学を退職されるまで、四十九年間という長きにわたり、同大学の史学科、さらに文化財学科で教鞭を執られ、多くの有能な学生を世に送り出してきました。その間、文学部長・法人理事、附属博物館長など大学の要職を歴任するとともに、学会では、出身大学の國學院の国史学会の評議員を二十三年間務められ、賀川光夫先生（別府大学史学科の創始者・考古学者）の後を受け、別府大学史学研究会の会長も務められました。

研究業績としては、附属博物館において『橋津村大庄屋日記』三卷、『広瀬井手日記』二卷などの近世史料の翻刻を行い、同時に近世文書を中心に蒐集を行い、別府大学アーカイブスセンター設立への前提を作りました。個人の研究としては、九州大学史学会、南島史学会、大分県地方史研究会、別府史談会などで、近世史研究を中心に多くの研究論文を発表しました。また、『宇佐市史』など県内の市町村史の編纂・刊行にも深く関わり、特に、平成の大合併を機に刊行された『竹田市史』では、編纂責任者として奮闘し、その下で、私も含め史学・文化財学科の教員が関わりました。

先生は、実に器用な方で、郷土竹田市の名産「姫だるま」を大学の実習で作らせたり、文書の裏打ちの方法を学生に教えるなど、実践的な指

導を得意としていました。この器用さはいろいろな所に発揮され、史学科の草創期は、賀川光夫先生の助手として考古学の発掘にも加わり、報告書にその名を連ね、文献だけではなく、様々な分野に興味をもち実践する別大史学を賀川光夫先生とともに牽引し走り続けて来られました。その一方では、授業には厳しい方で、「鬼後藤」と呼ばれる一面も持っていました。しかし、それはただ厳しいだけでなく、一人一人の学生をしっかりと見て指導しているということです。そのため、卒業生の名前を実に良く記憶している先生でした。

今、別府大学のような地方の大学、特に文学部は厳しい時代を迎えています。このような時代だからこそ、後藤先生のような、柔軟、かつ教育に厳しい姿勢が求められていると思います。私は現文学部長として、建学の精神とともに、賀川先生と先生が築かれてきた文学部、史学への思い、精神を受け継ぎ、微力ながら、この難局の時代を切り抜ける舵取りができるように、先生の御霊にあらためてお誓い申し上げます。

平成二十七年二月一日